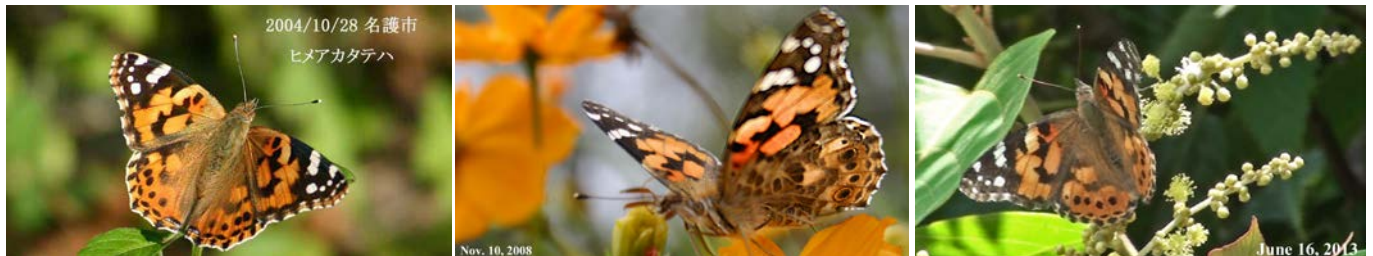


昆虫採集をはじめた人の多くは、チョウの仲間中タテハチョウ属がもっとも好きな種類となります。大きさが適度の中型で、その飛び方は、アゲハチョウやモンシロチョウなどが、見た目、めちやくちやな軌道で飛ぶのにくらべて、タテハチョウの仲間はとても敏捷で、グライダーの滑空に似て滑るようにスイスイと格好いい飛び方をします。活動しないときは羽をぴったりと閉じた状態で静止するためタテハ(立羽)とよばれるのです。ヒメアカタテハのヒメは、小さい、かわいいというイメージをあらわし、このチョウの場合は近似種のアカタテハとの比較でやや小さめのアカタテハとよばれているわけです。ヒメアカタテハは多くのチョウと同じく花の蜜を吸うのが大好きで、10-11月、西畑の花畑ではコスモス、マリーゴールド、センニチソウなどの花蜜を求めてたくさんの数が飛び回ります。人が近づくと驚いたかのように花を離れてヒラリと旋



回したかと思うと、なんのことはない、驚かせたはずの人の足元に「どうきれいでしょう？」と、その桃紅色の美しい翅表を全開した状態で止まってくれたりする愛嬌者です。花蜜を吸う姿や路面で羽を広げる状況など、いろんな姿勢をみせてくれるので、前回紹介したベニシジミと同じく写真撮影に適したチョウです。ヒメアカタテハは日本で見られるチョウの中で、唯一、全世界に分布しています。幼虫の食性は幅広く、ヨモギ、ハハコグサ、オオバコ、野菜畑のゴボウやシュンギク、コンフリーやゼニアオイの葉っぱも食べます。この食性のひろいことが世界中に分布している理由のひとつでもあります。西畑花畑周辺になぜ個体数が多いかということ、幼虫が主として野原のヨモギ類を食べて育ち、西畑花畑の周辺一帯にはそのヨモギがふんだんにあるからです。幼虫は若いあいだは黒い毛虫で、最終段階の終令幼虫になると灰色を帯びたシックな色合いの毛虫となります。幼虫時代には、ヨモギの場合葉っぱの先端部分を上手に綴った「巣」をつくってその中に潜むという習性があるため、巣の部分は葉っぱ裏側の白っぽい色がとても目立つため、人間の目で探せばいとも簡単に見つけられます。蛹になるときも、周りの葉っぱに糸掛けをした巣の中で垂蛹となります。かなり気温の下がった12月中にも野外で幼虫を見ますが、寒さには弱く、幼虫のままで死んでしまうこともあります。また、ヨモギが雑草であるため、定期的な草刈



と幼虫時代が合致してしまうと、幼虫は全滅という目にあります。松波町のユーアイタウン緑地公園(通称ひまわり公園)では、何度もそういう運命に会う状況を目にしており、草刈でやられそうだと気がつけば、幼虫を回収してチョウにまで育てて放してやるということもします。ヒメアカタテハはおもにチョウのまま冬を越す(越冬)とされ、幼虫や蛹で越冬する可能性も考えられますが、高砂地区での詳細調査データはありません。

